



# 転生しちゃったよ (いや、ごめん) 5

ALPHAPOLIS

ヘッドホン侍  
*Headphonesamurai*

アルファライト文庫 

▲ ジョーン=ヴェリトル

ウィリアムスの教育役。  
美形でDS。研究バカ。

▲ シフォン ▲

犬の獣人で、元『影』の少女。  
ウィリアムスの専属メイドと  
なるべく修業中。

▲ ユカリス

エルフの里で暮らす、  
セフィスの幼なじみ。

▲ サン ▶

ウィリアムスの  
親友で、学園寮の  
ルームメイト。天然。

▲ リリィ ▲

ウィリアムスの母で、  
もち肌の美人。親バカ。

▲ キアン=ベリル

ウィリアムスの父。  
エイズーム王国の  
騎士団長を  
務める。親バカ。

▲ セフィス

エルフの少女。  
ウィリアムスの同級生。  
少しおバカなところがある。

▲ ウィリアムス=ベリル

前世の記憶を持ったまま、  
名門貴族ベリル家に転生した  
本作の主人公。

1

俺——ウィリアムスIIベリルが談話室で同級生のサンとセフィスとともに雑談している  
と、セフィスが膝をたたきながら声を上げた。

「あたしが飛び級するつもりって書いた手紙を、召喚獣のリリスちゃんに届けてもらった  
のよ。そしたらね、お爺さまったら『あのセフィスが飛び級じゃと!? わしが生まれてか  
らも経験したことのないほどの大災害が起きるぞ。おそろしや』とか言ってたんだって！  
ありえないよね！ほんと、孫をなんだと思ってるんだっての」

ぶんすか怒っているセフィスには申し訳ないが、その発言には苦笑を禁じえなかった。  
思わずサンと顔を見合わせてしまう。

セフィスはエルフの里にいる頃からちよつとアホ……じゃなくて、ズレれた発言をして  
いたのだらうな。うん。想像つく。今もたまに言語怪しいときあるしな。

日本の高校生から転生して八年、通算して中身二十五歳の俺からするとセフィスは幼く  
て未熟、というレベルじゃなくて、どうも抜けている。

サンも変なやつであることには変わりないものの、彼の場合は言葉のミスとか知識による問題じゃなくて、行動がおかしいだけだ。いや、それはそれで問題なのだが、地頭は悪くない。とりあえず天然ボロイなだけなのである。

うん、セフィスとは決定的に違うんだよな。どこがどうとは言わないけど。

でもセフィスは里を出るまでずっと、妖精たちの「雑談」という名の騒音に悩まされていて、日常生活を送るのも大変だったというからな。お爺さまのその反応は、当時のセフィスの印象からきているものなのだろう、きつと。たぶん。そうであって欲しい。

「……あ、えつと、セフィスのお爺さまが生まれてからつて……お爺さまもエルフだよな？」  
 気づかぬうちに俺は遠い目になっていたらしい。セフィスに訝しげな視線を向けられてしまったので、俺は慌てて話題の転換をかねて質問をした。

「うん。今、二百歳くらいになるんじゃないかな」

セフィスが俺の意図に気づいたかどうかは分からないが、彼女は小さく首を傾げると顎に指を当てながら答えてくれた。

二百歳くらいつて。桁が違った。さすがエルフ。

俺のファンタジーなイメージを裏切らなかつた。

俺は一人妙に納得していたのだが、そこで突然、声が上がった。

「二百歳!？」

普通は驚愕に値するものであつたらしい。未だにエルフ族は他種族との交流が浅いからかな、サンが声を裏返らせて、座っている椅子から器用に飛び跳ねた。

おい。だからその動きどうなつてんだつての。

なんでそんなギャグ漫画じみた動きができるんだ。物理法則無視してるよね？ サン君。いや、そもそも、この世界には魔法なんでものがありましたね。物理法則とかさよならグツバイだったよ。火の玉とか召喚とか、どこから出てきてるんだつて話だよな。質量保存の法則とか涙目で全力疾走していくのが目に浮かぶわ。

つて、ちょっと待てよ。

もしや、サンはその動きをするために魔法を発動したのか!? そんな気配はなかつたぞ。まあ、発動していてもいなくても、ある意味天才だよ。役に立たないから超無意味だけど。お兄さん、君が不思議すぎるよサン。きつとこれは考えちゃいけない問題なんだな……。真面目に答えを出そうとしたら、思考の渦にハマッてしまいうんサン不思議な動きに気を取られているうちに、いつの間にか二人はお爺ちゃん話で盛り上がった。

「うちの爺ちゃん魔法道具職人でさあ、まあもう引退してるんだけど。歳とつて歯とアゴが弱くなってきたわい」とか言つて、自動で噛み砕いてくれる機能をつけた入れ歯の魔法道具を作るからつて、ここ一週間くらい工房にこもつてたらしいんだよね」

「うんうん、それで?」

セフィスがわくわくした表情で相槌を打つが、会話に途中参加した俺も続きが非常に気になる話だった。

爺ちゃん……妙なところに魔道具を使おうとするな。

魔道具って相当高いじゃないか。入れ歯の魔道具作るとは。

前世で言ったら、最新鋭のパワードスーツのAIシステムと技術を惜しみなく組み込んだ総入れ歯です！ って、メカニカルな白い歯をニカッと光らせて笑顔を向ける感じじゃないか、それ。

「でき上がって喜んでつけたはいんだけど、なんか失敗してみたいで。ズーッとガチガチと連続で歯が動き続ける欠陥魔道具になっちゃったんだって。それだけならまだいいんだよ？ 魔道具に失敗はつきものだから。でもね、爺ちゃんったら『こうなったら意地じゃ』とか歯をガタガタさせながら言ったらしくてさあ」

「どうなったのよ！」

結末を待ちきれないといった様子で、セフィスがサンに詰め寄った。

俺もうずうずして待っている。

さあ、どうなったんだ爺ちゃんの歯とアゴ！

「うん、爺ちゃんったら結局『うむ。アゴの筋肉が鍛えられたみたいじゃ！』とか言っつて、魔石取り外してただの入れ歯にしちゃったんだ。で、干し肉とかを普通に食べてるんだっ

て！」

爺ちゃん！ もはやそれアゴのトレーニング機じゃないですかー！ 何作ってんのですか！

これには思わずアゴが外れるかと思うくらい笑った。アゴつながりだな。……はい、ごめんなさい。嘘です。せいぜい、頬がびくびくするくらいでした。

それにしても、祖父かあ……。

と、自分の祖父について考えようとして、はたと気がついた。俺、転生してから祖父という存在に会ったことないわ。話を聞いたこともない。

もしかして、すでにご臨終なされちゃってたりするのだろうか。

それで両親が俺に言っていないのなら納得だが、聞かない俺も俺だよな。

気づいた瞬間に物凄い後悔の念に襲われる。

俺ってば、前世では爺さんにめっちゃくちや世話になったのに、孝行もできないうちに逝かれてしまった。だからもし生まれ変わって今度そんな機会が訪れたら、恩は早めに返そうと思っていたのにな。いざ転生してみたら、その存在を確かめることすらしていないなんて。

せっかくの記憶の持ち越しを、いつも上手く使えない。

まったく、俺はバカヤローだな。

前世の爺さんのことを忘れることなど決してできないけど、もしかしたら俺は、今世の爺さんで前世の爺さんを上書きしたくないと、俺の爺さんは前世の爺さんただ一人なのだと思いたいのかもしれない。無意識に考えないようにしていたのかもな。

それくらい、あの爺さんとの思い出は大切なのだ。

今の俺を作る、その思い出は。

楽しい氣に自分たちの祖父の話で盛り上がるサンとセフィスをよそに、俺は今となっては遠い過去に思いを馳せていた。

「それでね……ちよつと、ウイル聞いているの？」

セフィスの声でハッと意識が戻る。意識を飛ばしてただけに何も言えない。こういうときはこうである。

「ごめん、聞いてなかった」

てへべる、と笑いながら謝る。

セフィスは「もうー！」と声を上げながらも、仕方ないといった表情で笑っている。サンも呆れ顔をしながら微笑んでいた。

## 2

「何しとんじゃ、お前……」

もうじき六十歳を迎えるであろうという老人が、呆れた声でそう言った。

後ろから声をかけられた少年は、ビックリと肩を跳ねさせる。そして、恐る恐るといった様子で振り返った。

「い……いや、そのう……」

少年は言い訳しようとするが、呆れた顔で少年を見る老人と目が合い、結局それは言葉にならずに尻すぼみになってしまった。

少年はこの間、どこのハエを追っているのかというレベルで視線をさまよわせているのだが、幸い、その様子は端からは見えなかった。なぜなら、少年は――

「サングラスにマスクとか、完全に不審者じゃねえか……通報されても知らねえぞ」

老人は肩を落として、深い溜息をついた。

そう、ランドセルを背負って学校から帰ってきた少年――自分の孫が、顔半分を覆い隠すほど大きなマスクにサングラスという格好をしていたのだ。呆れて怒る気にもならない。

それに、老人には少年がこんなことをしている理由に、おおよその見当がついていた。結局自分は少年の力になれていないのだということが分かってしまつて、気落ちする。

そして、何より少年の発想は毎度のことながら斜め上過ぎて、怒るよりも脱力してしまつたのだ。

「いや、克夫さん。通報はされませんで。僕は大きく見られてもせいぜい小学四年生ですから、誰かが目撃しても子供の遊びだと思つただけですよ」

老人——克夫が溜息をついているうちに、気持ちを立て直したのだろう。さっきまでビクビクしていた少年が、やけに理知的な台詞を返してきた。おまけに、サングラスを学者よろしくクイツと指で動かすポーズつきだ。

——これで小三だもんなあ……。

克夫はトホホと泣きたくなくなつてきた。突然姿をくらました自分のバカ息子はどこへ何をやっているのか知らないが、もし目の前に現れるようなことがあつたら、一発と言わず完全に伸びきるまで殴り続けるに違いない。降参のタツプをされても気がつかないフリをするだろう。

もうずっと顔を見せていないバカ息子に呪詛を吐きながらも、まあ孫だけでもそばにいてくれるのは幸せだと、何とか現実を受け入れる克夫であった。

「中学生になつても、それをそのままやる気がよ、翔」

「……あつ」

溜息交じりにそう言うと、克夫の孫、翔は声を漏らした。

どつやらそこまでは考えていなかったらしい。こんなところを見ると、まだ子供だと安心する。

目の前のことに必死なのが子供だ。将来がなんだと頭を悩ませるのは、もうちょっと大人になつてからでいいのである。

自分が翔くらいの年齢のときは、イタズラし放題で大人を困らせていた。

子供はイタズラでも何でもして、鼻水たらして遊んでいればいい。

少なくとも克夫はそう思っていた。

「で、なんでそんなことをしてんだ？」

克夫は廊下を歩きながら尋ねた。翔は克夫の後をサングラスとマスクをしたまま、ついてくる。

「……びよ、病気の予防です」

ずいぶんと間を空けてから震える声で返ってきたのは、そんな答えであった。克夫は後ろにいる翔には見えないことを分かつた上で、苦虫を噛み潰したような表情になった。

「こりゃあ、相当重症だなあ」

克夫は誰にも届かない小さな呟きを、かすれた声で漏らした。



翔の母親が死んですぐ、彼の祖父と名乗る男性が1LDKのボロアパートにやって来た。母を亡くして呆然として居るうちにあれやこれやと世話を焼かれ、翔が気がついたときにはもう、その男性の家に一緒に住むことになっていた。男性の名は克夫というらしい。

翔は生まれてからその時まで、一度も父方の祖父である克夫に会ったことはなかったから、勝手に祖父はもつけないものだと思っていた。だから、突然現れたその人は、翔にとつて祖父というより遠い親戚のように感じられた。

最初は不安で仕方なかった。しかし克夫は口は悪いものの、常に翔を気遣ってくれる。それに翔の母親とは違い、翔の醜い顔を見ても嫌な顔一つしない。とても優しい人だった。克夫は翔の顔などに気にしないと分かったが、普段から平然としていられるかといえは、話は別だ。

母に「その顔が憎い」と言われたあの日から、顔なんてないものとして生きていこうと決心した。しかし、どうあがいても顔はついているものだし、その身から離すことはできない。いくら努力しても、のっぺらぼうにはなれないのである。

どれほど顔以外の面を見てもらいたくても、他人にまず映るのは顔なのだ。

だから仕方なしに顔を隠す方法をとってみたのだが、やはり克夫には呆れた視線を寄せられてしまった。確かにこれでは中身を見てもらう以前に、不審者と思われるに決まっている。

克夫に指摘されて初めてそのことに気づいた翔は、マスクを外しながら赤面していた。前を歩く克夫は呆れてこそいたが、翔を馬鹿にした様子はなかったし、何より翔に無関心でなかったことが嬉しかった。

怒りでも呆れでもいい。

家族に何かしら反応してもらってこんなに嬉しかったんだ、とサングラスをかけ直しながら翔はにっこりと笑った。

そこでちょうど廊下が終わわり、克夫が右側の扉を開けた。そこは、畳敷きの部屋の真ん中にコタツが設置されているという、典型的な和風のリビングだ。

コタツの上にはみかんが置かれており、前にはテレビがある。

これまで家事と勉強漬けの毎日を送っていた翔は、この部屋で初めて娯楽というものを覚えてしまった。コタツにみかんって最高だ。休日にテレビを見ながらダラダラと過ごす時間は想像以上に幸福だった。

それと、翔の父が残していったという小説やゲームにも大いにはまった。小説を読んでいると時間を忘れてしまって、たまに夕飯の準備が遅れそうになることもある。と



も、さすがに間に合わなかったことはないが。家事は翔が行うと自分で言ったのだ。よくしてくれる克夫に、少しでも感謝の気持ちを伝えたい。

そう言って克夫を説得すると、本人には微妙な表情をされてしまったが、克夫はいつもご飯を食べると美味しいと褒めちぎってくれた。それがまた翔には嬉しかった。

そんなことを考えていると、リビングの入口で立ち止まってしまっていたらしい。克夫が不思議そうな顔で見えた。

「何でもありません」

翔は苦笑すると歩き出した。



背負っていたランドセルを部屋に置き、さっさと宿題を済ませる。リビングの奥に四畳ほどの個室があつて、そこが翔の部屋としてあてがわれた。克夫は学習机と本棚を買ってそこに置いてくれた。

翔は家に帰ると、いつもルンルンで学習机に向かつていた。宿題はすぐに終わってしまふし、小学校の学習内容はとっくに終えてしまっていたから、翔が机でやることと言えば

もっぱら読書だった。『学習机』という名前ののに学習に使わないなんて、とちよっと申し訳なくなる翔だった。

宿題を終えた翔は、早速コタツにもぐりこんだ。すると、玄関の開く音が聞こえてきた。どうやら、今日は克夫が早く帰ってこられたみたいだ。

克夫は職場で頼られているらしく、夕方の定時で帰って来ることはほとんどない。一度克夫に連れられて家にやって来た職場の人が、「克夫さんって本当にすごいですよ」と翔に教えてくれた。

その男の人は本当に克夫を尊敬していて、そんな尊敬される人が自分の祖父だと思つと翔は誇らしかった。自分も将来は尊敬されるような人間になりたいと、そのときから人生の目標にしている。

その克夫が珍しく早く帰って来て家にいるものだから、翔は内心とても喜んでいた。

二人並んでコタツに入ってテレビを見てみると、しばらくして唐突に克夫が口を開いた。

「なあ、翔」

「はーん」

「お前は、その……いや、うん。俺は今日、『たまには早く帰って休んでください！』身体でも壊したら大変ですから『って部下の娘つこに怒られちまってな。確かに前の俺だったら、夜遅くまで会社で過ごしてたら、そりゃすげえ大変だったのよ。でも最近は何も無

理しているわけでもねえからよ、なんでかかって考えたら、お前がいてくれるからなんだなと気づいてな」

克夫は最初、何か他のことを言いたかったのではと気になった翔だったが、後半の台詞でそんなことはどうでもよくなった。翔は拳を握って、感動にプルプルと震えてしまう。

『お前がいてくれるから』

克夫のその言葉が、何度も頭の中で繰り返される。

役に立っているんだと、ここにいていいんだと実感し、嬉しかった。今までの努力が報われたような気がした。

「……と感謝して……っておい!? どうした翔!」

知らぬ間に、感動のあまり涙がこぼれ出てしまっていたらしい。

はらはらと涙をこぼす翔に気づいた克夫は、慌てて翔を宥めようとする。気遣わしげに、でも不器用に背中をポンポンと叩かれて、ただでさえ涙腺が緩んでいた翔は、涙が止まらなくなってしまった。

——必要とされてるんだ。

本当に嬉しかったのだが、涙腺を使うのが久しぶりだったからか制御できなくて、どんどん激しくなってしまった。

しゃくりあげて泣いているうちに、いつしか泣いている理由が分からなくなって、でも

なぜか泣けてきて、どっしりよもなくなっただ。

翔はとうとう泣き疲れて眠ってしまったが、最初は焦っていた克夫も途中からは落ち着いて、ずっと翔の背中を撫でていた。それが余計に翔の涙腺を刺激したのだが。

その日、翔は人生で初めて、泣き疲れて眠るという経験をした。

### 3

気がついたとき翔は、部屋の布団で寝ていた。外では小鳥がちゅんちゅんと鳴いている。この底冷えするような寒さは朝の空気だ。

ぼーっとしていた頭が覚醒するにつれて、昨日の記憶がよみがえってくる。そして、翔は顔面蒼白になった。地面がなくなっただかのような気分である。

——泣き疲れて眠ってしまったんだ。

せつかく役に立っているとされたばかりだったのに！ これでは克夫に呆れられてしまう。

翔はまた泣きそうになったが、それでは昨日と一緒に歯を食いしばって涙をこらえた。泣きすぎたせいで、眼が腫れぼったい。じんわりと滲んだ涙がしみたが、無視してさっ

さと布団から出て着替えると、顔を洗った。水道から出てきた水は痛いくらいに冷たい。けれど、今はちょうどよかった。

そして台所に向かう。リビングの奥にある翔の部屋はちょうど、同じくリビングに面する台所の隣にある。

朝ご飯には味噌汁と焼き魚を作ろうと思ったが、今日はご飯が炊けていないことに気づいた。いつもは寝る前に朝炊けるように炊飯器を予約しているのだが、昨日は泣き疲れて寝てしまったからだ。

「仕方ないか……」

翔はそう呟くといそいそとコートを着て、家を出た。朝ご飯はパンにしよう。そう思い、近くのコンビニに向かった。



「翔……！ どこ行ってたんだてめえっ」

翔が家に帰るなり、玄関先にいた克夫に怒鳴られながら抱きつかれてしまった。

「えっ……かつ克夫さん？」

翔は困惑して声を裏返らせる。自分は何かしてしてしまったのだろうか。

そこまで考えて、自分が出かける原因となったことに思い当たった。今日はまだ朝ご飯を準備できていないのだ。顔を青くした翔は、反射的に謝っていた。

「ごめんなさいー」

「なんで謝る〜」

しかし、克夫は抱きしめていた腕を離すと、翔を見つめて真剣な顔でそう言った。

翔はさらに不安になった。

このままじゃ、僕は捨てられてしまう——そう思ったのだ。

「朝ご飯を用意できなかったから……」

震える声でそう告げると、克夫は一気に顔色を変えた。

「来い」

外を歩いて冷たくなった翔の手を握り、克夫は強引に翔を家の中に引っ張っていった。

「どこに行ってたんだ？」

克夫は翔を無言で連れていくと、リビングに入ったところで口を開いた。

「……朝ご飯用に、パンを買いに行きました」

「そうか……いきなり怒鳴って悪かった。でも、頼むから何も言わないで家を出て行かないでくれ」

——家出して、そのまま帰って来ないのかと思った。  
昨日あんなことがあった矢先にこれだ。本当に肝が冷えた。

朝起きたら、昨日泣き疲れて眠ってしまったはずの翔の姿がなくなっていたのだ。克夫には、翔が泣いた理由は分からなかったが、涙を流しているのにひどく嬉しそうだった。そんな幸せそうな表情を引き出せて喜んでいたのに、突然姿を消したのである。

思えば、翔は我がままも言わないし、それどころか、いかにして克夫の役に立つかということはかなり考えて日々を過ごしている。

克夫には、そのことが歪に思えた。

それはまるで、悪いことをしたら捨てられてしまおう、と行動で語っているようで。

昨日の失態で、翔は克夫に嫌われたと思ったのかもしれない。

子供は我がままを言って大人を困らせるくらいでいいのだ。大人はそれを許して子供を育てる。それは克夫にとっては本当に当たり前で普通のことだったから、翔はそう思っていないということに、今の今まで気づけなかった。

それだけ翔が、その年齢に見合わない気配りをしていたということである。

そして何よりも。

翔ときちんと腹を割って話していなかった克夫にも責任がある。この孫の父親である克夫の息子を、一応は育て上げたのだから、どうにかなるという自惚れが心のどこかにあっ

たのかもしれない。

母親を亡くしたばかりで、思い出させるのは酷だろうと以前の生活の話題を避けてきたつもりでいたが、実は放置してただけではないか。

克夫はそのことに気づいて、胸が張り裂けるような思いがした。

保護者になると言っておきながら、自分は一体何をしているのか。

「翔」

すっかり翔の定位置となったコタツの左側。

リビングの奥の部屋に近いその席を、翔は気に入っているようだった。克夫はそこに翔を座らせると、まっすぐ見据えて彼の名を呼んだ。

早朝のまだ温まっていないコタツの席に、ちよこんと座っている翔の肩がピクリと動いた。

克夫はその向かいに座り、翔を見つめた。

やはり何かを恐れるように、翔は縮こまって克夫をチラリと見ている。

「翔？」

先ほど怒鳴ってしまったことが効いているのかもしれない。

克夫は努めて優しい声を出し、もう一度呼びかけた。

「……は……は？」

小さな声で返ってきた言葉は、震えていた。克夫は舌打ちしたい気分になりながら、何とか台詞を絞り出す。何がお前をそうさせているのか。

「翔は、これからどう生きるつもりなんだ？」

「……これから、僕がどう……？」

翔は、今にも泣き出しそうな顔をしている。

捨てられるでも考えたのだから。今すぐにでも、「俺が可愛い孫を捨てるわけねえだろー」と怒鳴って抱きしめてやりたくなるが、それでは駄目だ。

克夫には分かった。世の中の常識を言葉や理屈で説明したって、心のあり方を変えることなんてできない。すぐに翔はその言葉を疑って、自分にもそれは当てはまるのだろうかと思ひ、大人の顔を窺う行動をしよう。

それでは今までの「嫌われない」生き方と何ら変わらないのだ。

これからの長い人生。

今ここで中途半端に克夫が慰めても、それはこの場をしのぐだけにしかならない。だから、きちんと彼の口から聞かなくてはならない。彼がこうなった理由を。

そうすれば、どこまでも一人で頑張ってしまう彼の手助けをすることくらいなら、克夫

にだってできるはずだ。

「……話を、前の生活のことを聞かせてくれないか？」

恐る恐る口を開いた克夫に返ってきたのは、沈黙。

翔は小さくなって座っている。若干顔色が青く、やはり、翔の母親は碌なことをしていないかったのだと分かった。そして今、その記憶を引き出すという苦行を翔に負わせていることも、克夫は理解している。

だから急がすことなく、じっと待った。

しばらくして翔は顔を上げ、ポツリポツリと語ってくれた。

気づいたときには父親がいなかったこと。

母親が自分を育てるために、毎晩遅くまで働いていたこと。

そんな母を助けたくて、少しでも喜んでもらえるように家事や勉強を始めたこと。

でも、そんな翔に母親は無関心であったこと。

いくら頑張っても褒めてくれなかったこと。

悔しい。悲しい。寂しい。そんな感情が渦巻いていたことだろう。

翔の小さな身体は終始震えていて、それでも何度も嗚咽を呑み込んで泣き出さないようにしているのが分かった。最後のほうは、もう見ていられなかった。

「……おかあさんは、僕が嫌いだったんです。僕はそれに気づいちゃって……。なん

で？　ってきいたら、おかつ、おかあさんは、顔が……きらいだって。ほくのかおが、きらいだって……」

気づけば、克夫の目から涙が溢れていた。

「馬鹿が……馬鹿野郎……」

克夫は翔をギュッと抱きしめた。

母親から嫌われて傷つかない子はいない。それどころか、無関心に放置された上、顔という自分ではどうしようもないものを否定されて。

こんなものを一人で背負っていたなんて。

つらかったろう。人を信じたくなくなるだろう。なのに、いつも微笑んで、顔を隠すことで嫌われないようにしようとした。

心が壊れていても不思議じゃなかった。

この子は本当に強い子なんだ。克夫は改めてそう思った。

「それで顔を隠したかったのか」

「だって……僕の顔は気持ち悪いでしょ？」

きつと今、克夫はひどい顔になっているだろう。客観的に見て絶対ジジイである自分のほうが気持ち悪い。でも、それを言ったところで意味がないことくらいは分かっていた。

「どこが？　かわいいじゃないか」

みっともなく涙を流しながら、克夫は少し乱暴なくらいに翔の頭を撫でた。

「翔。顔なんて、その人の一部にすぎないんじゃないか？　たとえば、俺がある日いきなり整形したところで俺は俺だ。俺がどんなに着飾ったって俺は俺だ。それは分かるな？」

翔が小さく頷いた。

「じゃあ、綺麗な姉ちゃんたちがいるとしよう。その中には、整形して着飾った俺を見て好きだと言っ奴もいるかもしれないねえが、俺の変わりように呆れて嫌う奴もいるかもしれないねえ。あるいは、整形とか関係なしに、俺の性格が好きだと言ってくれる人が現れるかもしれないねえ」

克夫は息を吸った。

「でも、俺は俺だ。何も変わらねえ。人に好かれようが好かれまいが俺は俺だろ。そうだ、人の好き嫌いなんて、何がきっかけになるか分からねえ。だから、お前は間違っちゃいねえよ。顔なんてなくても生きていける。でも逆に、あつたって何の問題もねえんだ」

翔の瞳が揺らいだ。

いや、違う。ポロリと涙がこぼれ出したのだ。目の下の粟が大きくなっていき、やがて弾けるように水滴が落下した。

悲痛な表情を浮かべた頬に、筋ができる。

急にそれが動いた。

「ぼく、がんばったんだ！ 欠点だってプラスにできるって分かってる。昔人さんみたいに顔芸だってできるかなって。でも……こわいんだ！ ぼくには何もないんだ！ だから、きらわれるのがこわいんだよ……！」

克夫は顔をしわくちやにして笑った。

「はっかやるう。俺がいるじゃねえか。顔なんて別に俺にや何の判断材料にもならねえよ。孫っただけで可愛いもんだからよ」

「意味が分かんないよ。何の説明にもなってないよ、おじいちゃん」

そう言った翔の顔はやっぱ涙でぐちゃぐちゃだったが、にっこりと、それは嬉しそうに笑っていた。



ふと目覚めると、まだ夜中だった。

昔の夢か……。昼間、サンやセフィスと爺さんの話をしたから、こんな夢を見たんだろう。あのときから変わらず俺は自分の顔が大嫌いで、でも俺は俺で、信頼できる親友も、家族もできた。俺を慕ってくれる美少女メイドさんまでできちゃったのだから、人生どうなるか分からないものだ。

まあ、その肝心<sup>かえじこ</sup>のメイドさん——シフォンの心を救ったのは、結局爺さんの言葉だったわけだけど。丸バクリしちゃったよね。俺自身が考えた言葉ではない。でも、あのときの爺さんの言葉は俺の一部となっているのだ。

前世では、友人といえは高校生になってやっとできた寺尾<sup>てらお</sup>くらいしかいなかったのだから、少しはこの世界に転生させてくれた髭<sup>ひげ</sup>ジジイ……もとい、髭<sup>ひげ</sup>の神様に感謝してもいいかもしれない。

一からやり直すという転生は、俺に爺さんの言葉をより深く噛<sup>か</sup>みしめる機会をくれたのだ。

眠れなくなってしまったからそのままベッドの上でゴロゴロしていると、二段ベッドの下でサンがもぞもぞと動くような気配がした。起こしてしまったかと思っただが……。

「ごはん！ にげないで！ 僕に食われて……！」

そう叫ぶ声が聞こえたと同時に、ポフツと布団に倒れこむ音が……。寝言かよ!?

どんな夢見て寝ぼけてるんだ。

俺はこらえきれずつい噴<sup>ふ</sup>き出した。

笑いながら考える。

そうだ、父さんに俺の祖父について聞いてみよう。やっぱ、まずは知ろうとしなくてはな。

## 4

昨日、お爺ちゃん話で盛り上がり過ぎて、この世界の祖父のことについて何も知らないと言つと気がついた。

生まれてからのことを思い返してみても、会ったこともなければ話を聞いたこともない。でも、あの親馬鹿な両親のことだ。

俺に祖父の情報を一切話してはいけないということは、何かしらの事情があるに違いない。俺が知らない方がいいことなのか。

いずれにしても、そんなことを電話で——通信機の魔道具で聞くわけにもいかんだろう。ということ、やっぱり夏休みに、実家へ帰ったときに聞くか調べるかすることにした。べ、別に今確かめることから逃げたわけじゃないんだからね！

夏休みの予定が決まった俺は今、寮の食堂の調理場を借りていた。なぜというツツコミは受け付けない。

今はもうお昼時は過ぎ、最も日が高くなる南中の時間——大体二時くらいだ。まだ夕飯の準備まで時間があるため、おばちゃんたちには食堂を快く貸していただけた。

生クリームに牛乳、砂糖と卵黄らんおうを投入して、混ぜる。とにかく混ぜる。

「ふふふん♪ ふんふふん♪」

鼻歌を口ずさみながらも猛烈な勢いで混ぜまくる。そして手をかざしながら、材料を投入したボウルを魔力で覆う。

唱える呪文はもちろん。

「ちちんぷいぷいちちんぷーい！ 《冷凍》じゃこらあー！」

冷凍の詠唱だ。さて、これでお分かりいただけただろうか。俺が今作っているのはパニラアイスである。

残念ながらパニラビーンズは調達できなかったため、正確にはただの牛乳アイスなのだ。が、その名称だとなんかかっこ悪いので、これはパニラアイスと呼ぶ。誰が何と言おうと、これはパニラアイスなのだ。そう、日本人はおしゃれそうな横文字に弱いのである。

とりあえずカタカナにしておけば、かっこよく思える不思議。

でも、あんまりやりすぎると中二病ちゅうにびょうとしか言われない。ニホンゴってムズカシイ。

「うん。固まってきたな」

少し離れた場所にいるおばちゃんたちにやたら見つめられているが、まあ、こちとら無償で場を貸してもらっている身分だ。許してしんぜよう。

後頭部やら背中やらにやたらと刺さってくる視線の矢印も、質料だと思えば安いもので



ある。

俺は心の広い紳士なのだ。

確かに、真昼間から鼻歌を歌いながら料理をしている八歳の男の子って、普通に考えれば目を引くのも分かる。俺だって、休日に材料持ち込んできて調理場を貸して欲しいなんて目をらんらんと輝かせて頼みこんでくる少年がいたら、思わず観察しちゃうわ。

そんなことを考えているうちに、アイスは完成していた。この間ずっと、頭の中で流していた三分なクッキングの曲を終了させる。

「さーて……と」

そして俺は振り返り、にっこり笑った。

まずは俺を見ている視線の主、食堂のおばちゃんたちの好奇心に応えねばならないだろう。借りたお礼もしなきゃいけないしな。

「ご婦人方、試食なさいませんか？」

俺は三歳のときに父さんから受け継いだ秘儀——猫かぶりを発動させ、お坊ちゃまスマイルを浮かべながらおばさんたちに近づくのだった。



「スピネル」

でっぷりと太った男は、一人になった皇帝の間で、部下だった男の名をポツリと呟いた。しかし、彼の呟きに返ってきたのは無言であった。もう何度か繰り返したその行為。

男はびくりと眉を動かした。

この場で名を呼べば、いつもすぐに現れていた裏組織『影』の長からの返事はない。

それは、先日の仕事の失敗を意味していた。

——エイズーム王国、公爵家嫡男ウィリアムスⅡベリルの排除。

男の計画を進めるのに、エイズーム王国最強の騎士キアンⅡベリルが障害になることは確実だった。だから弱みを握るべくその息子の誘拐を企てたのだが、不運なことに、その息子も異常に強い魔力を持ち、計画の邪魔になりそうだと判明したのだ。早いうちにその芽を摘み取っておこうと思ひ、スピネルに命じたのが今回の仕事だったのだが、もっすでに時期は遅かったらしい。

しかも、失敗に加えてスピネルという大事な駒を失うことになった。

「間に合うか……？」

男は小さく呟くと、大きな身体を揺らしながら歩み始めた。

## 5

「ウィル君、ありがとうねえ」

食堂のおばちゃんが嬉しそうに俺の頭を撫でた。

バナラアイスはやはり好評で、あつという間におばちゃんたちに平らげられてしまった。異世界でも、女性が甘味に目がないという法則は健在らしい。

ただ、一つおばちゃんたちには教えなければならぬだろう。

アイスは甘い悪魔と言われるくらい、その見た目に反してカロリーが半端ではないというところを。

しかし、こちらの世界にはまだカロリーという概念がないため、どう説明したものか。

アイスは太りやすいんですよ、とでも言えはいいか。おばちゃんたちの体格を見るともう手遅れだという気も……ゲフンゲフン。それは言っではいけないことである。

異世界であっても、女性に体重の話は厳禁だ。

「甘いものは滅多に食べられないけど、美味しいわよね」

「うんうん。私は『ぜりい』とか好きだわあ」

「ブルブルの食感と果物の甘さがたまらないわよね」

と、まあ俺が悩んでいるうちに、おばちゃんたちは雑談タイムに突入している。

話題は当然甘味。皆大好き『ぜりい』だ。

まあ俺が犯人だろうと思っただその貴方！ 誤解してもらっちゃ困るぜえ。

この『ぜりい』は俺が生まれる前、元日本人である初代国王陛下が広めた料理の一つなのである。初代国王陛下は日本にあった色々な文化をこの世界で普及させてくれたのだが、どうやら料理は苦手であつたらしく、残っているのはこの『ぜりい』くらいなのである。

まあ、現代日本からやってきた男性だ。料理なんてしたことがなくてもおかしくないもんな。この世界に持ち込んだ文化だつてちよつと偏つてるし。

召喚獣として仕えていたシロに『チューニビョー』だと言われたお方。

案外、前世の俺と同じ——男子高校生だったのかもしれない。

男子高校生でケーキやらアイスやら、スイーツを作る奴は相当レアだろう。俺はそこに入るけど。前世のバイトで身につけた知識と技術がここに来て役立ったわけだ。

それに、ゼリーはゼラチンで固めただけで作れる簡単スイーツだからな。作ったことがなくても、ゼラチンの知識があれば開発できたのだろう。

ちなみに、この世界ではオークという魔獣からゼラチンを作っている。

オークは、言ってみれば二足歩行の豚ちゃんだ。前世で読んだ色々な創作物にもオーク

は多く出てきたが、この世界のオークは二足歩行であること以外、日本にいた豚ちゃんと同変らない生態をしている。

雑食で、意外に綺麗好き。ぶぎぶぎと鳴いて、よくあるファンタジーでモンスターとして現れるオークのような、剣などの武器を扱う知能はない。

まあ、一応魔獣に分類されるのだけど、いわゆる家畜状態となっている。人間を見かければ襲いかかってくるため、オークを飼育している人は相当強いらしい。主に元冒険者が老後にやりたりするそうだ。

その牧場——と言いつ切るには少し抵抗があるが——を直接訪ねたことはないが、商人のブースさんたちの伝手で会った牧場主さんは、太い腕を持つゴリラのようなおっさんだった。

その人も元冒険者で、現役の頃はBランクまで上り詰めたとかなんとか。Bランクというのは『ちょっとした達人』くらいのランクで、地元では有名人なのだそうだ。

冒険者ランクがあるなんて、さすがファンタジー！

俺はついつい興奮して、牧場主のおっさんに詰め寄って説明を求めてしまった。おっさんは戸惑いつつも、根気よく付き合ってくれた。

うん。今考えると、すごくいい人だったよな。俺の頭を撫でながら、長時間付き合ってくれたんだから。俺は公爵家の嫡男だとか、貴族だとかは言っていなかったから、ただの子

供の我がままに付き合ってくれたんだ。

ていうか、俺。自重しようよ。振り返ると恥ずかしくなってくる。

まあ、まあ、その時間は無駄になったというわけではない。冒険者について詳しくなれたからな。

冒険者のランクは強さを表す基準である。最低のEからはじまり、SSで最高のランクとなる。SSランクの強さを一言で表すとしたら、災害級である。一人で山を崩せるくらいの強さがこのSSランクらしいのだが、まあこれがなんと、うちの父さんなのだ。

地震、雷、火事、親父。

この言葉をリアルに体現してしまっている父さんであった。

まあ、細かいランクの話はどうでもいいんだ。

さて、ここで当然、冒険者ランクはどうやって決まるかという疑問が出てくる。

そこで登場するのが、神！

すごい。さすが異世界。

しかも、冒険者ギルドが新たに支所を造ると、冒険者カードを作成する魔道具がどこからともなく現れるという驚きのシステム。

冒険者ギルドに所属することの証明であるこのカードには、ランクが記されているという。つまり、神様が強さを表してくれるのだ。

ちなみに、他のギルドを立ち上げた際にも、ギルドカードを作成する魔道具が出現するらしい。

あの髭ジイやるな。

冒険者カードには、その人が倒した魔獣の魔力量が記録され、一定量に達するとランクが上がるのだとか。他にもカードにはその人の属性やMP（魔力量）、HP（体力）、さらには『称号』とやらが表示されるそうだ。

うん。すごくゲーム的。

なんというか、この世界、詠唱が日本語だったり、システムが日本のRPGっぽかったりと、随分と俺のような日本人からの転生者に優しいシステムな気がする。気のせいだよな？あの軽いノリの神様を久しぶりに思い出してみる。

もし俺のことを思って転生先をここにしてくれたのだとすると、少しくらいは感謝しないとな。

……そういえば、髭は剃っただろうか。そもそもあの神様が髭に植物を引っ掛けて植木鉢を落とすなんてボカをしなければ、俺は今頃、青い春でキャッキャウフな高校生活を満喫していたに違いないけどな！……違うよな。違うよ！……そう願います。

ちなみに、冒険者カードのことを知った当時はまだ実家暮らしだったから、父さんにカード見せてと言ったのだが、ランクとMP、HP、倒した魔獣の魔力量しか見せてくれなかつ

た。カードは、任意の項目を見せたり隠したりできるらしいのだが、父さんめ。

俺が知らないと思つて、まんまと称号を隠したわけである。

そうなるも当然気になるもので。俺は身辺調査をいたしました。幼少期から続けた家庭内スパイ活動の成果は、こういうときに活かされるべきなのである。

で、メイド長のマリーさんに事情聴取した結果。

父さんの称号は、『キアン様』だった！ ぐふう！ これは隠したくなるわ！

俺が抱腹絶倒したのも仕方ないだろう。なに、キアン様つて。称号なの？ 名前じゃないの？

ちなみに母上であるリリー様の称号は『傾国の氷姫』。

やっと称号つぼいのきた。すごく中二病だけど。

だが、そういうことは言わないほうがいいのだろう。俺だつて知っている。もちろん、純粹に瞳を輝かせながら「かあさん、かっこいいー！」と叫んでおいた。

俺が登録したらどんな称号が出るんだろうな。試してみたい気はしたが、それ以上に怖くなった。人のことを笑えなくなったらどうしよう。

「ウィル君、このレシピ教えてくれないかい？」

関係ないところに思考を飛ばしているうちに、おばちゃんたちの話題は一周回つて帰ってきたようである。

しかし、レシピか。別に広めてもいいんだが、少しくらいはプースさんとやってる商会で儲けておきたいよな。ということ。

「企業秘密なので、商会の許可を得られたらいいですか？」

年齢を活かした上目遣いを駆使し、眉を下げて困り顔でおばちゃんたちを見上げる。すぐさま、「ぐふうっ」と噴き出す音が聞こえ、おばちゃんたちが何やらうずくまって震えているが、そんなに似合わないだろうか。笑うほど似合っていないかっただろうか……！

確かに中身二十五歳の平凡顔がぶりっ子してたら、あれなのかもしれないけどさあつ！ いいもんいいもん。

とりあえずは、ごまかせているもん！

震えながらも必死に頷いてくださったおばちゃんたちに背を向け、俺は厨房へ引き返すことにした。

アイスはおばちゃんたちに全部食べられてしまったからな。材料にはまだまだ余裕があるし、追加で作るのだ！

あと、このレシピをメモって、商会メンバーであるニャルさんのところに持って行こう。ニャルさんなら、わりかし頻繁に王都に来ているみたいだし。

うむ。今の俺がやるべきはこのアイスの材料の分量の調整だ！

顔の調整とか言うなよ！ お兄さん泣いちゃうからね！



「あ、ウィルー！ どこ行ってたのー？」

寮の談話室に戻ると、そこにはサンとセフィスの姿があった。

俺の姿はいち早くセフィスに発見され、入口に立ったところで呼び止められる。

飛び級試験に向けての勉強は、今日の分はひとまず終了となっているらしい。セフィスはご機嫌だ。

「いや、ちょっと食堂の厨房を借りてた」

「え、料理してたの？」

質問に答えると、なぜかセフィスが焦った様子でさらに質問を重ねた。

「うん。俺、結構料理は得意だよ。」

なぜ得意かと問われても答えられないけどな。

セフィスの焦る理由が分からなくて首を傾げながら返すと、セフィスはうなだれてしまった。とりあえず安堵する。理由を聞かれてたら、適当にはぐらかさないといいなかった。

「どうしたんだ？ セフィス」

「いや、何でもないので……どうして裁縫<sup>さいほう</sup>だけでなく料理まで！ あたしの立つ瀬<sup>たつせ</sup>が！」  
 何でもないと言ったわりに、ぶつぶつと眩<sup>くら</sup>きながら俯<sup>うつむ</sup>くセフィス。  
 本人は聞かれていないつもりのようなのだが、あいにく俺の耳はチート性能。ばっちり聞こえてしまっている。ついでに隣に座っていたサンにも聞こえていたようで。

「……」

三人の間に微妙な空気が流れた。

つまり、あれか。女子力的な沽券<sup>こげん</sup>にあれしちゃったのか。

「まつ！ まあ、俺は商会の手伝いとかでね！ ほら、いろいろやってたから！」

声を裏返しながらも、俺はごまかそうと言葉を絞り出す。

「そ、そうだよ！ ぼくらの年齢じゃ、危ないからつて台所にも入れてもらえない家庭もあると思うし！」

俺の意図を理解してくれたサンも、焦りながら台詞<sup>せりふ</sup>を繋いでくれた。

よし！ 今のうちに！

「そ、それより、試食してくれないかな！」

俺はペンダント型の四次元ポケッ……亜空間の魔道具から、今しがた作ったばかりのアイスを取り出した。

ちよつと勢いがつきすぎて、机に置く際にガンツと音が鳴ってしまったが、大丈夫。

「うわあ、何これ！」

「甘いデザートみたいなものだよ。冷たいから一気には食べないでくれな」

ふつ。ちよろいぜ。

アイスを取り出した瞬間の甘い匂<sup>にお</sup>いに気づいて、目を輝かせるセフィス。

さつとスプーンをペンダントから取り出し、その手に握らせた。

つまるところ、餌<sup>えさ</sup>でごまかせ作戦である。

ついでにサンにもアイスを差し出した。ごまかすのに協力してくれた感謝の印である。

「んー！ 美味しい！」

さつそくアイスを食べたセフィスは、ほっぺたを押さえながら声を上げてくださった。

ミッション達成。危機は去った。

ご機嫌に戻ったセフィスを見て、俺は話題を変えることにした。

「それでさ、サンとセフィスは夏休み、なんか予定で埋まっちゃってたりするかな？」

「僕は大丈夫だよ？」

「あたしもないけど？」

よし、二人とも特に何もないようだ。

予定があつたら、餌として作った——いや、俺の勇気を後押しする材料としてわざわざ作ったアイスちゃんの意味がなくなってしまうところだったからな。

俺は小さく息を吸うと、長年の夢を叶えるべく意を決して口を開いた。

「じゃ、じゃあ、俺んちに遊びに来ない？」

そう、前世からの夢、友人を自宅に招くという夢を叶えるために！

……あ、あと、祖父について尋ねるといふ俺の決心を後押しするためにも……ね。

## 6

私のご主人様のあれは小さい。あれって？ もちろんあれはあれです。年齢と身長です。でもそれ以外は全てが大きいです。心も広くて、強くて、優しく、天使みたいに可愛い。『影』だった私を救ってくれたご主人様——ウイル様は八歳。次期公爵家当主なのに偉ぶっていなくて、獣人の私を平等に扱ってくれる。「シフォン」って名前をつけてくれたのもご主人様だった。

でも、それだけじゃない。

『隷属の首輪』を取って自由にしてくれたし、どうしようもない状態だった私を闇の中から救い出してくれた。

このお屋敷に忍び込んで、ウイル様に捕らえられたとき。

操られていたとはいえ、たくさんの罪を犯した私は、もう生きていても仕方がないと思っ  
た。

そんな私に、ウイル様は安易に同情の言葉をかけるのではなく、叱ってくれた。でも優  
しさがこもって……抱き締めて、なでなでしてくれたんです。

獣の耳も可愛いって撫でてくれる。尻尾も……その  
と、とにかく！

ウイル様はすごい。四歳の時にすでに勉強は完璧だったし、元『影』の私より強いし……  
みんなが知らないようなことも知っている。

さすがキアン様……旦那様の息子。うっん、そんな言葉じゃ片付けられない気がする。  
なんというか、規格外すぎて、旦那様がちょっと霞んじやうくらいだ。

ウイル様だから仕方ない。

私は何が起きてても、ちよっとやそっとじゃ驚かない。そう心に決めた。でないと、心臓  
が保たない。ウイル様だからね。

そんなすごいウイル様のこと、私は大好きだ。助けてもらった恩というものもある。け  
れど、それだけじゃない。勉強を教えてもらったり、ウイル様の趣味に付き合ったりして  
一緒に時を過ごすうちに気がついたのだ。

ウイル様は本当に優しく、強い。力の強さじゃなくて、心というか、なんというか。

九つも年下なのに、私より色々なことを知っていて、ずっと大人みたいで。私のほうがウィル様に見守られているのが分かって、なんだかこそばゆかった。

自分でも、こんな小さな子を相手におかしいんじゃないかと思う。私だって他の人からこんな話を聞いたら、危ない趣味の人だと思うだろう。

でも違う。ウィル様は子供なんかじゃないのだ。本当にすごい人。何者なんだろう。そして、気づけば好きになっていた。慈愛に満ちた優しい目で見られただけでドキドキした。好き？ いや大好き。違う、もうむしろ愛してます。というか、あの笑顔は反則だと思いません、はい。

だから、ご恩を返すという名目で付き人になって、ウィル様のお側にずっといることにした。

私の夢は決まった。

ウィル様にそう言っと、嬉しそうに困ったような顔をした。

私が首を傾げると、ウィル様は真っ直ぐ見て言ったのだ。

『シフォンは自由なんだよ？ 恩とかそういうのは気にしなくていいんだ』

優しすぎる。やっぱりウィル様はウィル様だ。

でもね。ウィル様にも直して欲しいところはある。

鈍感すぎるの。普段は神懸かっていると思うほど頭が良いだけに、その鈍感さを呪って

しまっ自分がいる。

ウィル様が旦那様に話してくださって、私の勉強の日々が始まった。

メイド長のマリーさんはすごく厳しい。けれど私が獣人だからと差別することはなかったし、いつも優しい目をしていた。

勉強はウィル様が教えてくれる。それだけで毎日が楽しかった。

けれど、幸せな時は一瞬にして過ぎ、呪いの時間——ウィル様の義務教育期間がやって来た。本当はあと二年くらい一緒にいられるはずだったんだけど、ウィル様が飛び級で入学してしまったの。さすがウィル様。

わがままは言えないけど、私はもう少し一緒にいたいなんて思ってしまった。

でも飛び級に飛び級を重ねて、高学園まで三年半で終わらせるつもりだった。

何だか、私にとっていいのが悪いのか。

というか、本当に凄すぎる。

そんなわけで、ただいま蒸し暑さも極まる夏真っ口中。待ちに待った夏休みがやってきた。





「ふんふん〜ん」

私は上機嫌で雑巾ぞうじんがけをしている。窓ガラスのキュッキュツという音もリズムに乗って楽しそうだ。私のしっぽもその音に合わせて揺れてしまう。

「ふん〜ん」

鼻歌が漏れてしまうのも仕方ないよね。ふと視界の端はしにチクリと入ったマリーさんも微笑んでいた。マリーさんも嬉しいんだろう。というか、今日は屋敷中がそわそわしている。

「ぎょ〜うは〜ウイル様が〜ん」

そう、なんとたつて今日はウイル様が屋敷に帰ってくる日。

一週間ほど前、キアン様が嬉しそうにそのお知らせを屋敷のみんなに教えてくださったのだ。

ウイル様が夏の長期休暇を利用して、学園からベリル領に帰ってくるのだという。

その知らせを聞いたときの盛り上がりよつと言ったら。待ちきれないとばかりに皆そわそわしていた。

キアン様も皆と一緒に喜んで、浮かれすぎて階段から足を踏み外してしまったのにはびっくりしたけど。空中で回転して美しく着地したのはさすがという感じだ。

でもでも、そのときのお話では学園でのご友人が二人くるとか。

ちょっと嫌な予感があるのは否いなめない。なんだってウイル様のご友人ですよ？ あんな

に素敵なウイル様がモテないはずがない。それでご友人が女の子だったら……。

恐ろしさで一瞬しっぽが逆立さかたった。

でも、そんな不安はウイル様が帰ってくるという事実に吹き飛ばされた。

そんなんと揺れるしっぽを、今日ばかりは止められそうにない。

そんなわけで、私はウイル様のご友人が宿泊するための部屋を、マリーさんと一緒に準備している。

二人でご機嫌だったからかな？ 二部屋の準備は早々に終わっちゃった。

屋敷の家事も、やけに張り切った他のメイドさんたちの手によって朝のうちに終えられているので、後は待つばかり。いったん、普段メイドが控ひかえている部屋に戻る。

「ごら、シフォン。そんなにそわそわ動き回っては、はしたないですよ。椅子いすにでも座ってじっとしてなやう」

「……はう」

マリーさんに窘たがめられてしょぼんとしてしまつ。すみません。はしやぎすぎました。

私はおとなしく椅子に座ると、窓の外を見ながらじっとしていることにした。

ウイル様が帰ってきたら、何を話そうかな。

背中にでぶんぶんと尻尾が揺れる風を感じた。

馬車に揺られること五時間。

飛ばせば四時間といった距離だが、今は別に急いでいるわけではない。途中で休憩を挟みながら、俺たちは王都から南に下るのどかな馬車の旅を楽しんでいた。

「俺たち」というのは、もちろん俺ウィルと、サンとセフィスの三人のことである。俺はついに友人を家に招くぞー！

王都に迎えに来たベリル家の馬車に、緊張の面持ちで乗り込んだサンとセフィスの二人もさすがに慣れてきたようで、流れていく景色を見たり、雑談をしたりと馬車の旅を楽しんでくれている。

俺はというと、人生初の一大行事にそわそわしっぱなしで落ち着かない。

楽しそうに会話する二人から、ふと目を逸らして車窓の外に視線を向ける。

そのとき、ちょうどベリルの街並みが見えた。

サンとセフィスが歓声を上げる。

うむ、そうである、そうである。

色とりどりの屋根で飾られたレンガ造りの家が軒を連ねる街並みは美しく、人々が行き

交い商売の声を上げる様は活気に溢れ、その華やかさは王都と比べても全然負けていない。そして、街の向こうにある小高い丘がチャリと見えた。丘の上の草原は夏の日差しを受けて、青々と輝いている。

学園に行ってからまだ半年も経っていないけど、この風景を見ると懐かしい感じがするな。

思わず目を細めて、外の景色を眺める。

「すっげえー！」

「ベリル領のウワサはきいてたけど、ホントにすごいね！」

二人の興奮した声に、俺はつい顔をほころばせる。

「まあね」

否定はしない。父さんが褒められたみたいで、自分のことのように嬉しかった。

この街を日夜苦勞してつくっているのは、父さんたちなんだぞ——と、思いつきり自慢したい。でも頑張って胸の中に留めておく。語り始めたら自分でも止められないからな。

俺にとっても——まだ全然仕事を手伝えてはいないけれど——自慢の街なのだ。

街の通りは人がごった返しているの、馬車は街に沿うように敷かれた道を進んでいくことになった。馬車を降りて歩きという選択肢もなくはないが、人の往来がすごいし、サンとセフィスには荷物がある。だから移動は難しがるうということ、馬車のまま脇道の

ルートに行くことにしたのだ。

すると、街のずっと向こうにある緑の丘の頂上に、チラリと建物が見えた。

近づくにつれ、その大きさが分かる。ぐるりと囲んだ塀の中にあるのは、白い大きな屋敷だ。正面に大きなガラス窓が並んでいて、そこに当たった日光がキラキラと輝いている。

サンとセフィスが顔を見合わせた。

「もしかしてあれって……?」

二人して俺を見てくる。

うむ。言いたいことは分かる。

俺も転生して、初めて外に出たときは度肝を抜かれたさ。

俺はあえて不敵に笑って口を開く。

「うん。あれが俺んちだ」



「おかえりなさいませ、ウイル様！」

家についたときには、すでに玄関口にメイドさんたちが並んでいた。

皆集まってくれたんだ。

思わずニコニコとだらしのない顔をして駆け寄ろうとした瞬間、俺は背中にビビツと嫌な予感が走って急ブレーキをかけた。

「おかえり、ウイル！」

案の定だよ！ 俺の勤、舐めちゃいけないね。

めちやくちや嬉しそうに父さんが駆け寄って来た。貴族らしい優雅な動きなのに、原チャリくらいの速度が出ている不思議。そして、緩み切った、俺とほとんど同じ顔の破壊力がやばいです。

慌てて踵を返し、全力で逃げようとしたがあえなく失敗。

抵抗むなしく、俺は父さんに捕らえられてしまった。

そして例のごとく、頬ずりされる。

だから！ 髭が痛いって！ 刺っているのかもしれないけど、その速度ですりすりされると、摩擦で俺の柔肌が悲鳴を上げるの！

がつくりしながら、何とか身体を捻ってサンとセフィスの方を見ると、やっぱりこちらを見てポカーンと固まっていた。

そりゃそうだ。大の大人が緩み切った顔で我が子に頬ずりしていたら、こんな反応になる。俺だってなる。しかも、国の英雄『キアン様』がやっているのだから。

公爵家当主で、しかも騎士団長で、国で一番強いつか言われている人物のこんな姿を見

## 立ち読みサンプル はここまで

せられたら、ギャップがありすぎてあなるだろう。ギャップ萌……えない。

「いや、すまない。取り乱してしまったな」

そんな二人の様子にやっと気がついたのか、照れくさそうに父さんが話しかけた。固まっていた二人はびっくりして肩を揺らす。

「いらっしゃい、サン君、セフィスさん。ゆっくりしてってくれ」

さすが父さん。

柔和な貴族らしい笑みを浮かべることで、今の暴走をなかつたことにするらしい。

サンとセフィスはそんな父さんの思惑に気づいているのかいないのか、すっかり気を取り直してしまったようだ。

……二人は俺との付き合いでスルーすることに慣れてるからだとか聞こえた気がするが、気のせいだろう。

二人はしきりに恐縮しながら、父さんの優雅なエスコートを受けて歩いていった。

その間にメイドさんたちが皆の荷物を運んでいく。

そのまま二人は玄関に入ろうとしたのだが、一歩足を踏み入れると同時にその足を戻した。俺は思わず頷く。

分かる、分かるよ。絨毯やたらふつかふかで高級そうだもんね。踏むの躊躇しますって。俺はあえて普段通りですよといった雰囲気、ずんずん絨毯の上を進んだ。

